

金祖の原型について——羅教の傳説を巡って——

夏
雨

一 序言

羅教は中國で誕生した民間教派の一つである。明の成化から正徳年間、運糧軍人の羅清が羅教を創立し、後に羅祖と呼ばれた。創立當初、羅祖は密雲古北口で説法を始め、次いで羅教はすぐに運糧軍人の間で傳播し始めたが、明代の高僧憨山徳清によって「邪説」^①として斥けられた。この民間教派は、明清の民間教派に深い影響をもたらした。羅教のイデオロギー「無生老母、眞空家郷」^②は、明清の民間教派に共通するイデオロギーとなった。羅教の經典『五部六册』^③は、寶卷の形式で世に出た後、

大量に刊行された。他の民間教派も相次いでそれに倣い、自らの寶卷を著し、明清に寶卷の刊行はピークを迎えた。羅教はまず運河流域に沿って傳播した後、各地へと擴散していった。羅祖の死後、羅教の衣鉢は彼の後代に傳承されたが、それとは別に大乘教という分派も生じ、その後、更に多くの分派がだんだんと現れ始めた。明朝の滅亡と清朝の初期の動亂を経験した羅教は、消滅したのではなく、民間に流傳し續けてきた。

羅教の創立から、その傳播や變化の過程で、開祖である羅祖及び羅教の創立に關する傳説がある。本論文ではこれらの傳説を羅教の傳説と稱する。羅教の傳説には、

主人公である羅祖以外にも、羅教と關係の深い人物が數人登場してくる。金祖はその内の一人である。數種ある羅教の傳説の中で、いずれも金祖は羅祖の師匠という立ち位置で登場してくる。傳世文獻において、神化された羅教の傳説としては分派である齋教の經典『三祖行脚因由寶卷』から登場している。『三祖行脚因由寶卷』は清の康熙年間に刊行された寶卷である。それ以前の羅教傳説の狀況は明晰にし難いが、少なくとも康熙年間までには、羅教の傳説は基本の筋を完成させていた。

従來の研究は、思想史的な視點から、羅祖の出身、教義や經典、羅教における佛教の繼承、及び後世の民間教派に對する影響を問題とし、羅教が如何にして創立せられたか、創始者の羅祖とはどういった身分の者であったか、これらについては先達によって多くの考證がなされてきた。しかし金祖の出自に言及した研究は未だに少ない。

宗教學によれば、神話と宗教とは密接な關係にあり、世界中の様々な宗教は、それぞれの神話システムを築い

た。宗教學の創始者マックス・ミュラーは、「人間精神には、生まれながらにして過去への畏敬が具わっており、また人間の宗教的敬虔さは、子の親に對する孝心と同じ、自然な水源から流れ出している。過ぎた時代の傳承が奇妙で野卑で、時に不道德ないし不可能に見えたとしても、各世代はそれらを受け入れ、再び堪えうる形に作り直し、さらには眞の深い意味を明らかにさえしてきたのである。」⁽⁴⁾と記している。マックス・ミュラーのこの言葉は、宗教における神話は各世代の信徒が繼承しつつ、絶えず書き換えながら形成したものであることを示している。宗教神話を再構築する過程は、宗教が發展した深い含意を反映している。故に、宗教神話を研究するのも必要なことである。中國の民間教派であるところの羅教にとつて、それに關連する傳説が神話と同等に扱われて良いかという問題もある。結論を出すにはまだ議論の餘地があるが、羅教の傳説には明らかに佛教、道教の要素が入り、宗教神話と同じように、信仰自體の狀況を反映していると言えるだろう。したがって、筆者は羅教の傳説形成の

起源やその影響を考察することによって、彼らが教團を構築した歴史の一端を垣間見ることができるとは、いかと考えている。中でも、主人公羅祖だけでなく、金祖という人物の由来や作られた過程にも注目すべきだと思われる。この論文では、羅祖の師父、金祖をテーマとし、金祖の原型とその變容を探索しながら、羅教の信徒が教團を構築した歴史の一端を明らかにしていくことを試みる。

二 先行研究

本稿の研究対象は羅教の傳説の中の金祖である。羅教に關する最も早い研究は、一九世紀にヨーロッパ宣教師によってなされた。イギリスの帝室亞細亞協會支那部門の會報 (Journal of Royal Asiatic Society) に、それに關連した研究が記載されている。宣教師以外でも、オランダの漢學者デ・ホロート (Jan Jakob Maria de Groot、中國名は高廷) がアモイで調査を行い、そこで羅教の分派を發見した。その著作『中國における宗教受難史』

(牧尾良海譯、東京・國書刊行會、一九八〇) において、彼は羅祖の傳説を紹介し、宣教師のエドキンス (Joseph P. Davis、中國名は艾約瑟) の研究とも結び附けて、兩者が目にした寶卷は同じく無爲教に屬するものであると論證した。

十九世紀ヨーロッパの研究者は文獻考證と實地調査を合わせて研究しているが、それ以降の研究では文獻考證が主位を占めている。對して、日本と中國の研究は主に文獻考證の手法を用い、それによって得られた成果も大きい。二十世紀四十年代、鈴木中正の「羅教について」(『東洋文化研究紀要』第一號、一九四三)、塚本善隆の「羅教の成立と流傳について」(『東方學報』(京都) 第十七號、一九四九) といった論文が相次いで世に現れ、羅教の成立や傳承過程、及びその教義について紹介した。澤田瑞穂の『増補寶卷の研究』(東京・國書刊行會、一九七五) は最も早く寶卷を系統立てて研究した大著である。そのうち、「羅祖の無爲教」なる一文が收められている。また、加治敏之「羅教の信仰の形成過程と「光」について

て」(『中哲文學會報』第十號、一九八五)、前川亨「羅教聖典の教理―『五部六冊』の分析」(『人文科學年報』第三十四號、二〇〇四)、酒井忠夫『中國幫會史の研究 青幫篇』(東京・國書刊行會、一九九七)、淺井紀『明清時代民間宗教結社の研究』(東京・研文出版、一九九〇)、鈴木中正『千年王國的民衆運動の研究』(東京・東京大學出版會、一九八二)、相田洋「羅教の成立とその展開」(『青年中國研究者會議編『續中國民衆反亂の世界』、汲古書院、一九八三)、野口鐵郎編『結社が描く中國近現代』(東京・山川出版社、二〇〇五)といった論文や專著は社會史的角度から民間教派の結社や反亂等の問題を分析している。また、これらの研究は羅教の一分派たる水手羅教が青幫へ轉化する過程に重きを置いている。吉岡義豊が執筆した『アジア佛教史 中國編Ⅲ 現代中國の諸宗教へ民衆宗教の系譜』(中村元、笠原一男、金岡秀友監修・編)には、「羅祖の傳説」という節があり、『聊齋志異』に書かれた羅祖に関する話を紹介した。その他に、馬西沙・韓秉方の『中國民間宗教史』(上海・上海人民出版社、一九

九二)の中の「羅祖と五部六冊」では、特に羅祖が投獄されたプロットを検證し、史實であると主張した。上述した研究はみな羅祖の出身、經歷等に觸れており、それらに對する詳細な考證や分析を行っている。しかし、羅祖傳説の形成については、往々にして一言附すだけで、詳細な分析を加えてはいない。その中で、羅教傳説の中心人物である羅祖の生い立ちについては、比較的多くの考證がなされてきた。以上の研究の中で、羅祖の師匠として登場する金祖に關して考證したものは、筆者の知る限り存在しない。

また、從來の研究の多くには、はっきりとした分野の壁が見られる。羅教關係の研究には、思想史的研究、社會史的研究といった二大分野がある他、幫會史などといった、更に細かいテーマに類別されているものもある。更に、分野の壁以外に、羅教の研究には時間軸上の壁も存在している。特に、中國の歴史研究においては、一八四〇年のアヘン戰爭を境界線として、古代史と近代史が分かれるため、その壁はより顯著である。というのも、

羅教は明末に誕生し、民國期に至って青幫が形成され、そしてその他の分派も様々な経緯を経ているため、全體としての傳承の流れが、中國史における一般的な歴史區分法によって分かれたれ、古代史と近代史を跨いでしまう。こうした分野の壁が羅教研究の一部に大きな龜裂をもたらした。濮文起氏がその著書『民間宗教與結社』（國際文化出版公司、一九九四、七十七頁）で言及したように、「〔青幫メンバーは〕自らを佛教臨濟宗の分派だと勿體振って話していた。そして、彼らは全く關係のない金幼孜、羅清、陸逵の三人を引つ張り出して、前三祖とした。」實際、青幫メンバーが自らの源流を叙述する際、話を造り上げることも多々あるが、明代には、羅祖が若い頃は臨濟宗の弟子であったとする記載もあり、金祖の原型も臨濟宗と關連がある（後に詳述する）。青幫メンバーが自らを臨濟宗だと稱するのは、このこととは何らか關連があり、ただのでっち上げでもなからう。また、羅祖が番兵を退けたといったような傳説も、青幫メンバーの手によるものではなく、康熙年間に著された羅教の分派、

齋教の經典『三祖師行脚因由寶卷』において、早くもこの傳説の原型が見られる。このように、青幫メンバーが羅祖傳説を造り上げたという誤った結論に至ったのは、恐らく近代史、幫會史を研究する者が民國期の幫會關連史料にのみ着目し、古代史に區分される史料にあまり氣を配らず、羅教と青幫が連續した存在であるとあまり意識しなかつたためであらう。以上のような研究狀況を鑑みて、羅教全體には隔たりが存在せず、一種の民間教派であるとともに、祕密結社を結成し、反亂や文學等々とも關連が深いものであるため、羅教研究も領域や歴史區分の壁を打ち破らねばならないと、筆者は切にそう思う。こうした壁を踏み越えることは本研究の目的でもあり、極力目指したい方法でもあり、ここに本研究のオリジナリティーも所在する。この點は本稿の史料選擇に顯れよう。

本稿で使用する文獻資料は、主に以下の四種類に分けられる。

1、『三祖行脚因由寶卷』。羅教の分派の一つである齋教

の經典で、羅教の傳説を記録した文獻である。この寶卷は、金祖については記していないが、羅教の傳説の形成時期を考える上では意味がある。

2、「青幫手冊」（青幫内部では「通漕」と言う）。青幫のテキストである「青幫手冊」にも金祖についての記述があり、そのうち『清譜輯要』を取り上げる。これは、「青幫手冊」がかつては様々な種類が存在しながら戦亂によつて多くが失われたとされる中で、現在まで傳來し、また詳細な記述のあるテキストであり、またタイトルからして、雍正初年に流傳していたとされる『清譜經』との関連性が想定される。恐らく、その内容を整理したテキストであろうと思われる。この他、本稿では民國期に成立した『道遺指南』・『清門考源』・『安清史鑑』も取り上げる。このうち、『道遺指南』は作者不詳であるが、行文や内容から見ると、青幫の關係者が編集・出版したものだと思われ、また『清門考源』も青幫の「弟子」の手になるものである。すなわち以上の三書は、青幫における口傳の系譜・規

則を整理したテキストと見なすことができ、そこには當時傳わっていた金祖に關する傳説が反映されている。3、元青幫弟子の回想録。本稿では、元青幫弟子——姜豪の回想録『和談密使回想録』を取り上げる。この本には、姜豪が元青幫弟子として知っている青幫の源流について記した内容がある。

4、明朝の史料。『明史』、地方誌、筆記など。そのうち一部では、金祖の原型に關する描寫が記録されている。以上舉げた史料は、文言文で書かれたものもあれば、民國時代に白話文で書かれたものもある。史料の原文を舉げる際、本稿は文言文を書き下し文に、民國時代の白話文と現代中國語を現代日本語譯にして示す。

なお、羅教の經典『五部六冊』（『苦功悟道卷』一冊、『嘆世無爲卷』一冊、『破邪顯證鑰匙卷』二冊、『正信除疑無修證自在寶卷』一冊、『巍巍不動太山深根結果寶卷』一冊）には、金祖についての記述は現れない。

三 羅教の傳説の中の金祖

羅教には様々な分派があり、齋教はその中の一つである。『三祖行脚因由寶卷』は齋教の經典であり、羅教の傳説を記述した文獻である。『三祖行脚因由寶卷』の出現は羅教の經典『五部六册』よりも遙かに遅く、光緒年間刻本『三祖行脚因由寶卷』の序文の末尾に署名された日にちによれば、この寶卷は康熙二十一年（二六七五年）に世に現れたものである。しかし、この寶卷は羅教について詳しく記述しているが、金祖という人物については記していない。つまり、これは羅祖を中心とした羅教の傳説であり、羅祖の師匠までは記述しなかった。ただし、康熙年間の羅教の傳説に、金祖という人物がまだ入っていないかったとは一概に言えない。

羅教には、水手羅教という重要な分派がある。羅教が創立されると、それは運糧軍人へと傳播していった。その時、羅教の組織はすでに形成されていたが、文獻が缺けているため、明代の羅教組織の状況は判明し難い。清

代に入ると、明代の運糧軍人の繼承者・漕運水手による羅教組織は行幫會社へと轉化し、更に、禁教等の要因により、それは祕密結社へと變容していった。これが後の青幫の前身である。以上が、水手羅教が祕密結社へと轉化していった歴史的過程の概要であるが、「青幫手冊」の中における羅教の傳説の記述は、さながら神話のようなものであり、創作された物語や神化要素が大量に盛り込まれている。その中で、金祖という人物は羅祖の師匠として登場している。

前文で述べたように、かつて「青幫手冊」には様々な種類が存在したが、戦亂によってその多くが失われた。現在まで伝わったものは、ほとんどが民國期に出版されたものである。古い手冊は盡く灰燼に歸したため、民國期に「青幫手冊」が再出版されるまで、羅教の内情や青幫の規則等は口傳で傳承されてきた。したがって、今日となつては、古い手冊の内容を知ることが叶わないため、金祖の物語が羅教の傳説に混入したという結果は與えられているのに、その混入した時期や経緯が何時だかはわ

からない。ただ、羅教関連の文獻の中において、金祖は「青幫手冊」にのみ現れる人物であるから、水手羅教が創作した人物だとは言えよう。

「青幫手冊」に記録された羅教の傳説は、版本毎に諸説ある。その中でほぼ一致している箇所もあれば、互いに矛盾している所もある。雍正初年、『清譜經』という手冊が既にある程度の權威をもって流傳していたが、戰爭のためにそれを含む譜書は盡く灰燼に歸した。後に、互いに内容の矛盾する手冊が多く現れ、孰れもののが確かなのかは定かではなかった。次いでそれらを蒐集した書物も現れ始めた。時は清末民國初期に至り、『清譜輯要』なる書が刊行されたが、その序によれば、『清譜輯要』はその時流傳していた叢書の中で最も詳細にして確實な版本である。今はその序文を信ずるに値するものとし、内容を見ると、その中にも手冊の記録が異なっている旨が記されており、更にその原因が説明されている。すなわち、「咸豐十年、洪楊の役、殃ひ家廟に及ぶ。有する所の譜書、灰燼すら存する無し。是の故道中の妙用、

其の本眞を失ふ。須らく先進後學して、遞(つた)ふるに口傳心授を以てし、相ひ沿ふに如くは無し。日久しくして性理各々殊なるを免れ難く、五花八門、互ひに相ひ之を詰難し、爭端並び起く。其の言ふ所を究むれば人人殊なりて、又た考證すること無きに苦しむ⁽⁵⁾。という事情によるものである。『清譜輯要』という書名から鑑みるに『清譜經』とは何か關係があろう。恐らく『清譜經』の傳世した内容を整理したものであると筆者は推測する。したがって、本稿では『清譜輯要』を基準としつつ、それと『通漕輯要』、『清門考源』、『安清史鑑』とを比較し、史實と照らし合わせて検討する。

『清譜輯要』によれば、金祖に關連する内容は以下のようにまとめられる。

第一代は清字輩の金祖、名前は碧峯で、南直隸應天府(今の南京)の人であった。景泰年間、帝都元戎の官職に就き、漕糧運送を監督・管理して功があった。後、高官位を謝辭し、官職を辭して出家した。紫霞山(『通漕輯要』には棲霞山と書かれてる)にお

いて修行し、福建連江出身の林山と、浙江海寧出身の陳震という二人の弟子を受け入れた。これが林祖と陳祖である。しかし、この二人の道は流傳しなかつた。金祖は甘肅蘭州府渭源縣に遊覽して回つた時、地元の羅姓の家族の軒下において雨宿りをしていたが、その際に羅姓の家族の五郎・羅寶と問答をした。その子供の才能が聰明であつたため、一卷の天書を取り出して彼に見せた。かつ彼を弟子として受け入れ、詩を残して去つた。

嘉靖年間、羅寶は科擧の殿試に採用され、學士を授與された。萬曆年間、羅寶は吏部天官を授與され、大軍を率い、法術を用いて烏恒國の反亂を平定した。しかし、軍隊を引き上げて北京に歸つた後、羅寶は姦臣に陥られ、天牢に入れられた。獄中にいた時、彼は念佛を唱え經を唱えて懸命に修行し、その後冤罪を晴らして出獄した。羅寶は獄中において五部の經を書き、一清道人の號を授かり、官職を辭して出京した。紫霞山の下に至り、金祖が派遣した童子と

出會うと、彼と一緒に金祖の元へ向かつた。⁽⁷⁾

『清譜輯要』では、金祖の名前は金碧峯となつており、南京の出身で、官を辭した僧侶という身分である。甘肅蘭州府渭源縣にて羅祖を弟子とした。羅祖以外に、金祖にはすでに林祖と陳祖という二人の弟子がいた。ここにおいて、青幫弟子の比較的完成された傳承系統が形作られた。羅祖にとつて師父である金祖、及び兄弟子である林祖と陳祖、これらを用意することで、羅祖の存在と傳教を辻褃の合う、信憑性あるものたらしめた。これは、青幫が自身の信仰の正統性を喧傳するためだと筆者は考へる。

そして、『清譜輯要』と同じく金祖の名前を金碧峯としたのは、『通漕輯要』である。『通漕輯要』にはこのように記されている。

羅教の創始者としての羅祖は、青幫の實質的な祖師であつたが、青幫の幫會手冊の中には、羅祖の前にまた碧峯という名の金祖がいた。青幫よりも前の二十四代のメンバーは「清、淨、道、德、文、成、

佛、法、仁、倫、智、慧、本、來、自、信、元、明、興、理、大、通、悟、學」という二十四文字の順序に従って名前をつけられている。金祖は青幫のメンバーによって第一代の祖爺と見なされ、その道號は清源であった。羅祖は金祖の弟子と見なされ、道號は淨清であった。羅祖を除き、金祖はまた林山、陳震という二人の弟子を受け入れた。彼らはそれぞれ淨修、淨覺という道號をつけた。羅祖は乾隆年間に翁、錢、潘という三人の弟子を受け入れた。この三



『安清史鑑』の巻首（秘密會社叢刊、臺北：古亭書屋、一九四〇）

人の弟子は翁祖、錢祖、潘祖と尊稱されている。乾隆年間において、行幫會社は實質的に開始されたのである。⁽⁸⁾

他に、金祖の名前を金碧峯と記しているものとして、『安清史鑑』という「青幫手冊」がある。しかし、『安清史鑑』の記録は雑駁で、同一書内に異なる説が登場する。『安清史鑑』の巻首において、碧峯は金祖の字であり、純が名前となっている。對して文中では、金祖の名前は圭峯と記されている。⁽⁹⁾

ここで注目すべきは、碧峯は金祖の名ではなく、字となっており、その名前が純に變わっていることである。金祖の名前を金純と記載しているのも、ただこの「青幫手冊」のみである。また、記録の混乱も別の視点から考えると、『清譜輯要』に記載されている、太平天國の亂によって青幫資料が損壊し、口傳によって傳承が維持されたという傳説、それを裏附けることができるのではなからうかと筆者は考える。換言すれば、同一書内に相矛盾する記載が現れるのは、口傳による混乱が多いことの

更なる證左となろう。

金碧峯、金純以外に、金幼孜という説もある。

金祖について一番詳しく記録しているのは『清門考源』である。この書物において、はじめ金祖の名前は幼孜であるとされているが、後には金祖を金純と呼んでいる。

彼が棲霞山に修行した時には師を持たなかったが、後で一人の老僧侶と出會った。この老僧侶は、金祖が西域の菩薩の生まれ變わりであり、達摩祖師が金祖にこの事を伝えるために彼を派遣したと述べ、五臺山に行つて佛門に歸依する事を勧めた。その後、金祖は五臺山に行き、鵝頭禪師に師事した。その後、金祖が圓寂した。彼の弟子の林山、陳雲に「將來、羅清という人物がここに來たら彼に經を授けよ」という遺言を残した。その後、羅祖が五臺山に行き、林、陳の二人は經書と符籙を羅祖に傳えた。羅祖は金祖と會つたこともなく、金祖本人が羅祖のことを知ろうとすることも無論なかった。彼はまず五臺山

にて道を勉強しており、後に嘉靖年間において吐魯番の反亂を平定した。反亂を平定していた時に金祖を思つたところ糧秣を見つけたので、反亂を平定した後、羅祖は五臺山に行つて金祖の臨濟宗の衣鉢を繼いだ。⁽¹⁰⁾

ここで、「青幫手冊」の他に、もう一つ資料を挙げておきたい。それは、一九九八年に出版された『和談密使回想録』である。この書物は日中戦争前期、蔣介石政府が日本と會談するために派遣した密使、姜豪の回想録である。姜豪はもともと青幫の弟子で、表面上は會談するための密使であり、實際は日本の情報を集めるために會談に赴いたスパイであった。日中戦争終結後、姜豪は共產黨側につき、上海文史館の研究員として務めた。これは彼が晩年に出版した回想録で、その中に「我所知道的青幫源流（私の知る青幫の源流）」という章がある。そこには、彼が聞き及んだ羅教の傳説が記されている。

金幼孜、號は碧峯。祖籍は南京城外の金家堡である。元の順帝至正三年（一三四三）に生まれ、明洪

武帝の時に進士に受かった。最初は北京の燕王朱棣の下で勤め、後に軍とともに南下し、糧運を監督する任に就いた。燕王が南京で位に就いた後、工部左侍郎に任命された。永樂年間に北京へ遷都した後は、文淵閣大學士に改めて任命された。成祖が自ら遼東に遠征した際、糧運を監督する命を奉り、まもなく遼東が平定された後、成祖とともに都に凱旋した。

金は世俗の煩わしきを見抜き、達摩を尊敬し、官職を辭して、棲霞山に隱居して修練を行った。後に五臺山へ赴いて授戒を求め、佛門禪宗臨濟派三十六傳、鵝頭禪師を師として仰ぎ、また、清源という名を頂いた。それから紫霞洞にて隱遁して修行を積み、數年後に世を去った。青幫はこうして達摩を始祖とし、金幼孜を一代目祖師としたのである。⁽¹¹⁾

この記述によれば、金碧峯と金幼孜という、金祖の名前としてよく見られる二つの説を、一つのものとしてまとめ上げている。すなわち、幼孜が名で、碧峯が號である。また、金幼孜は明代の進士であると明確に指摘して

いる。この書は、金祖の原型を明らかにするための直接的な材料を提供した。また、この書物が出版された時代もあらゆる「青幫手冊」よりはるかに遅く、加えて、その作者も青幫の幹部ではなく、ただの一般信徒であったのにもかかわらず、その内容は細部に至るまでほとんど「青幫手冊」と合致している。このことは、青幫メンバーの間の口傳は比較的嚴密で系統立っており、「青幫手冊」に記載された口傳の傳説も現實とは一致しており、信ずるに足る内容であることを物語っている。また、青幫が自由度の高い羅教組織から、嚴格な幫會組織へと變容し、その傳承も譜籍が破壊される以前から嚴密で系統立っており、破壊された後も口傳によってその特徴を保ったという側面を見ることができるといえる。

ただ、『道遺指南』のみ、金祖は山西太原の人、金家堡に居り、修行地點は四川成都黃山である、と記している。以上の情報をまとめると、金祖に關連する内容は以下の表のようになる。

つまり、金祖の名前は碧峯、純、幼孜という説がある。

	『清譜輯要』	『通漕輯要』	『安清史鑑』	『清門考源』	『道遺指南』	『和談密使回想録』
名	碧峯	碧峯	純	幼孜・純		幼孜
字・號		清源	碧峯・圭峯			碧峯
出身	南直隸應天府	江蘇隸應天府	應天府	應天府	山西太原金家堡	南京城外金家堡
身分	紫霞山の僧侶	棲霞山の僧侶	棲霞山に修行、五臺山臨濟宗鵝頭禪師の弟子、護國禪師	五臺山鵝頭禪師の弟子	達磨の弟子、四川黃花山に修行	棲霞山と紫霞洞に修行、五臺山鵝頭禪師の弟子

碧峯の頻度は最も高い。金祖の出身について、『道遺指南』を除き、他の「青幫手冊」はどれも「應天府」（今の南京）と記述している。

四 金祖の原型

以上をまとめて、金祖の原型は三つと考える。青幫メンバーは金碧峯（峯は峰の異體字で、ここでは全て峯として扱う）、金幼孜、金純の三人の話を組み合わせて金祖という人物イメージを造り上げた。そしてこの三人、特に金碧峯には、更に深く考察する価値がある。

(一) 金碧峯

金碧峯という人物は、明代の羅懋登が著した小説『三寶太監下西洋記』に登場する主人公の一人であることに注目されたい。青幫の弟子はこのイメージを借りて羅祖の傳説を膨らましていたのである。『三寶太監下西洋記』に登場する金碧峯のイメージを取り入れたことを合わせて考えれば、青幫メンバーが羅祖のイメージを形作る際には、ある程度文學からの影響を受けたことが言える。

明代後期には、歴史上實在の人物、特に道教の祖師などについて、世人を救うために天から遣わされたというように、出身を神格化した上で、法術などを用いて番兵を退かせ、民草を患難から救ったとする、似たようなプロットを持つ物語が多數出現した。青幫で語られる羅教の傳説も、明らかに實際の事跡がそうした枠組に當てはめられることで成立したものと見える。羅教の成立年代が明朝後期であったことも、この種の小説や物語の影響を受ける要因であったものと思われる。

金碧峯に関する記述は小説の中のみ現れた話ではなく、明の筆記史料等によく書かれた話でもある。特に金碧峯と明太祖の話は幾つかの史料に現れた。

例えば顧應祥の『靜虛齋惜陰錄』には以下のような記載がある。「金碧峯は、勝國の一和尚なり。宣州に寓す。太祖江を過ぐるに、元氏の故臣迎へて謂ひて曰はく「將軍 霸を恃まば、我 當に財賄有りて納贖すべし。」と。太祖之を叱りて曰はく「我天に應へ人に順ひ王道を行へり。汝敢へて霸を以て我を視んや。」と。故臣曰はく

「若し篤く王道を行はば、宣州の胡僧金碧峯。を尋ぬべし。」¹²⁾

史部の書籍『明書』にも類似した記載がある。「時に太祖江を渡り、偶々二元臣迎へて謂ひて曰はく「今霸たらんと慾すれば、我將に財貨を納贖せん。」と。上叱りて曰はく「我本より天に順ひ人に應へ王道を行へり。汝敢へて我を霸視せんや。」と。元臣曰はく「若し篤く王道を行はば、宣州の胡僧金碧峯を尋ぬべし。必ず授くる所有り。」¹³⁾

上記二書の記述はほぼ一致している。このことから見て、金碧峯の傳説は、明代では既に廣く傳播しており、外史筆記に共通して登場するものであることがわかる。

筆者が案ずるに、金碧峯が明太祖に指導を與えたというストーリーは、金祖が護國禪師に封じられ、皇帝と密接な關係にあつた、というような「青幫手冊」に記載された羅教傳説のストーリーの藍本の一つではあるまいか。

正史において、金碧峯が國師に封じられた記載は存在しない。ただ、金碧峯という人物が實在して、明の太祖

と何らかの関係があったことも否めない事実である。明代の南京城外には碧峯寺が存在し、萬曆年間の『應天府志』には、「碧峯寺 聚寶門の外に在り、即ち古瑞相院鐵索寺の故基なり。國朝洪武中、僧金碧峯建てて、今の額を賜へり¹⁴。」と記され、『金陵梵剎志』も碧峯寺について「國朝洪武中の敕建にして、異僧金碧峯居りて、因りて名づけり¹⁵。」と記している。上述の、金碧峯が明の太祖に教えを施したという記載と比べれば、碧峯寺に關する記載の方がより信憑性が高い。その名前を以て命名された寺院が存在することは、金碧峯という人物が實在していたことの證左となろう。そして、碧峯寺が明太祖の敕命により建立され、太祖自らその扁額を賜ったことも、金碧峯が太祖と全く無關係ではないことを物語っている。國師に封じられたことに至っては、十中八九青幫メンバーによる潤色で、考證する餘地は全くない。

『安清史鑑』、『清門考源』、『和談密使回想錄』では、いずれも金碧峯を鵝頭禪師の弟子としている。それに着目してみると、それを記した史料が一つある。清の明喜

が編輯した『緇門世譜』の臨濟派の條によれば「又た第十四世、界源禪師。嗣法の門人は性金、號は碧峯なり。又た一枝を旁出す。(中略)又た碧峯下第二世、鵝頭禪師。北京西山において、萬壽戒壇を建て、臨濟の一枝を横出す¹⁶。」ということであるが、この碧峯性金禪師が臨濟宗第十四世の界源禪師から獨立して別に一派を爲し、その弟子に鵝頭禪師を取り、その一派を確立したことがわかる。ここに記されている金碧峯と鵝頭禪師の關係は、『安清史鑑』、『清門考源』、『和談密使回想錄』のものとはあべこべであるが、師弟關係にあったことや一派を爲したことは一致する。また、これとはやや異なる記述も清の守一重が編輯した『宗教律諸家演派』に見られる。

「六祖より法は南嶽讓に傳わり、南嶽 馬祖に傳ふるは一なり。馬祖 百丈海に傳へ、百丈 黃檗運に傳へ、黃檗運臨濟義玄禪師に傳へて、後人立てて臨濟宗と爲す。(中略) 臨濟下十九世。碧峯性金禪師。演派は二十字なり。(中略) 臨濟下二十五世(碧峯下第七世)。突空智板禪師。演派は十六字なり。(中略) 臨濟下二十七世(突空下第三

世)。北京西山鵝頭禪師。演派は二十四字なり。⁽¹⁷⁾この記述によれば、臨濟義玄から十九世、碧峯性金禪師に至って分派し、彼から七世代経て突空智板禪師で分派し、そして、突空智板禪師から更に三世代経て鵝頭禪師に至るのである。この記述における人物関係は『安清史鑑』、『清門考源』、『和談密使回想録』とは一致しないが、鵝頭禪師を臨濟三十六傳と三十七世としている点ではかなり近く、口傳であったことも鑑みれば、これは誤差の範囲内である。

また、皇帝との交流及び五臺山などに着目すると、僧侶の傳記を記した書物『補續高僧傳』と『繼燈錄』に、それぞれ「金碧峯傳」⁽¹⁸⁾と「代州五臺靈鷲碧峯寶金禪師」⁽¹⁹⁾の條にて記載されている。前者の方がより詳細であるが、その記された事跡は兩者ほぼ同じである。この二書の記載によれば、金碧峯は五臺山に庵を結んで説法し、元の至正戊子年（至正八年、一三四八）に順帝に召され、そして、明の洪武元年（一三六八）に太祖に召されて、佛法について尋ねられたということである。ここに記され

る金碧峯は確かに五臺山に住んだことがあり、そして、永樂帝ではないものの、元の順帝、明の洪武帝とは交流がある。年號に注目してみれば、この二書では元の順帝に召されたのが至正八年となっており、『回想録』では生まれが至正三年となっているが、これほど僅差になっていることは偶然ではなからう。また『繼燈錄』では南嶽下二十二世としており、先ほど擧げた『宗教律諸家演派』において臨濟下十九世（南嶽下二十二世）となる碧峯性金禪師と丁度一致する。

『清門考源』には、金祖の傳記以外にも「碧峯禪師傳錄」という章がある。その中に記録される碧峯禪師は、「金性禪師、乾州石氏子」となっている。「金性禪師」は明らかに「性金禪師」をひっくり返したものであり、「碧峯禪師傳錄」において碧峯禪師は金祖と呼ばれている。恐らくこれは、明代の臨濟宗文獻を引用し、「碧峯性金禪師」を金祖で置き替えとしようとしたものである。留意すべきは、この内容は同書の「金祖傳錄」とは相反するということである。この現象は『清門考源』に

のみ見られ、これは作者の個人的作爲によるものなのか、あるいは作者の屬する分派に流傳する説であるのか、考證するには資料が足りず、定かでない。

以上見てきた文獻が歴史的事實であるかどうかはさておき、その臨濟宗の傳承、師弟關係、庵を結んだ五臺山皇帝との交流等の事跡を勘案すれば、青幫において傳承されてきた傳説の原型が、上で挙げた禪文獻に少なからず由來することは疑いようがなからう。

(二) 金幼孜

『明史』に金幼孜の傳記があり、「金幼孜、名は善以、字は行、新淦の人なり。建文二年進士、戸科給事中を授く。成祖即位し、改めて翰林檢討となり、解縉等と同じく文淵閣に直し、侍講に遷る。」と記されている。文淵閣大學士という官職は『和談密使回想録』の記述とも一致する。更に、『明史』には金幼孜が永樂帝の北征に付き従ったという記載もあり、これも『和談密使回想録』の記述と類似している。

(三) 金純

金祖の原型について

洪武年間から宣徳三年（二四二八）まで文選司郎中、江西布政司右參政、刑部左右侍郎、禮部尙書などの官職を歴任した、正統五年（二四四〇）に亡くなった。永樂九年（一四一三）、金純は皇帝の命令を受け、宋禮と一緒に會通河を治理した。また徐亨、蔣廷瓚と一緒に魚王口の黃河故道を浚渫した。²¹會通河とは元代に掘られた山東東平から臨清までの運河で、漕運の河道の重要な一部分である。金純は會通河を浚渫した漕運として貢献した。彼が亡くなった二年後（正統七年、一四四二）に羅祖が生まれているので、羅祖が彼に弟子入りするのは不可能であった。後世に彼が祖師と認められた原因は、漕運への貢献によるものだろうか。

金幼孜と金純の正體は比較的明確であり、記載も比較的完成されたもので、考證すべき箇所は反比例して比較的になく、「青幫手冊」の内容と一致する箇所も殆どない。金幼孜と金純という二人の人物が爲した事跡を、青幫メンバーが直接借用して羅教の傳説の中に組み込んだと推測できよう。

五 結論

前節の考證により、羅教の傳説の中で、金祖のイメージの原型は金碧峯、金幼孜、金純の三人に由來する。その中で金碧峯のイメージには多くの由來があつた。青幫メンバーが借用する以前から、既に數種の傳説が形成されておられ、羅教の傳説を造り上げるに際して、青幫メンバーはそれらを一緒に扱ひ、小説・禪門典籍などに現れた様々な金碧峯イメージを融合させた。金幼孜、金純に至つては、その正體が明確であるために、大きくは改造できず、彼らの事跡に少し潤色を加えて、直接借用したようである。

注意すべきは、今日見られる羅教の傳説は「青幫手冊」の記載によるが、青幫はもともと水手による羅教組織から轉換したものであり、傳説の源は青幫の成立よりも早いことである。明代後期、濃い宗教雰圍氣の下で、通俗小説の中にも宗教の人物を主人公とする題材が増えた。羅教の傳説も、似たようなプロットがあり、

明代通俗小説の影響を受けたと見られる。したがって、羅教の傳説も、明代あたりから形成され始めたと考えべきであろう。この影響下で、羅教は明代小説の中の金碧峯のイメージを借用し、また、水手らは漕運を生業とし、川道が彼らの仕事場であつたため、川道の整備を行つた金純というイメージをも借用した。更に、羅教傳説の中には、羅祖が出征したストーリーもあるが、これは、永樂帝に伴つて出征し、大いに永樂帝から恩寵を受けた金幼孜のイメージを借用したためであろう。このようにして、青幫は自らの傳説に肉付けを行つただろうと筆者は考へる。

註

- (一) 愁山德清『愁山老人夢遊集』卷三十二、化生儀軌「今世間五部六冊之說、乃外道邪人妄稱師長、偷竊佛祖言句、雜集世俗鄙俚之言、以惑愚民、所謂邪道亂眞者、即今聖旨所禁皆此輩也。在家之人既有好善之心、何不歸依三寶而必墮此邪法豈智人哉？」(清順治十七年刻本)六一九頁

(二) 莊吉發『真空家鄉』「明清時期、民間祕密宗教各教派

- 所念誦的寶卷經籍中多見有「無生老母」或「無生父母」等字樣、反映無生老母的崇拜、已經成爲民間秘密宗教各教派的共同信仰、明末清初以來、民間秘密宗教信仰主要就是以無生老母爲信仰的核心。」(文史哲出版社、二〇〇二) 四二八頁
- (3) 寶卷に關する研究は、澤田瑞穂『増補寶卷の研究』(東京・國書刊行會、一九七五)及び酒井忠夫『中國善書の研究』(東京・國書刊行會、一九九九)などがあり、寶卷の由來と發展を詳しく記述した。
- (4) マックス・ミュラー「比較神話學」、『比較宗教學の誕生』所收、山田仁史、久保田浩、日野慧蓮譯(國書刊行會、二〇一四) 二二頁。
- (5) 『清譜輯要』序「咸豐十年、洪楊之役殃及家廟。所有譜書灰燼無存。是故道中妙用、失其本眞。須先進後學、遞以口傳心授、無如相沿。日久難免性理各殊、五花八門、互相詰難之。爭端並起。究其所言人人殊、而又苦無考證。」(崇義悟學社復刊、祕密會社叢刊、臺北・古亭書屋、一九四〇) 一頁
- (6) 吏部天官は吏部尙書の別稱である。唐の武后が一時的に吏部を天官と改稱し、後世も天官という名稱を襲用した。天官は吏部の別稱であるが、吏部天官は吏部尙書を指す。『文獻通考』卷五十二、職官志六・『周禮』天官「太宰掌建邦之六典、以佐王理邦國。」(中略) 唐武太后

- 遂以吏部爲天官、戶部爲地官、禮部爲春官、兵部爲夏官、刑部爲秋官、工部爲冬官、以承周六官之制。」(『周禮』天官「太宰は建邦の六典を掌り、以て王の邦國を理むるを佐く。」(中略) 唐の武太后遂に吏部を以て天官と爲し、戶部を地官と爲し、禮部を春官と爲し、兵部を夏官と爲し、刑部を秋官と爲し、工部を冬官と爲し、以て周六官の制を承く。) 北京・中華書局、二〇一〇。
- (7) 『清譜輯要』二五―三三頁を参照
- (8) 張樹聲『通漕輯要』(崇義悟學社復刊、祕密會社叢刊、臺北・古亭書屋、一九四〇)
- (9) 耿毓英等『安清史鑑』(祕密會社叢刊第二輯、臺北・古亭書屋、一九四〇)
- (10) 陳國屏『清門考源』(民國叢書第一編、初版一九四六、上海書店、一九八九)
- (11) 姜豪「和談密使回想錄」(金幼孜號碧峯、祖籍南京城外金家堡、生于元順帝至正三年(二三四三)、名洪武時考中進士、先在北京燕王朱棣前任職、后隨軍南下、負責都督糧運。燕王在南京正位后、任工部左侍郎、永樂開遷都北京、改任文淵閣大學士、及成祖親征遼東、奉命都督糧運、不久遼東平定、隨成祖凱旋回朝、金看破紅塵、仰慕達摩、辭官隱居棲霞山修煉、后又轉至五臺山求戒。拜佛門禪宗臨濟派36傳鵝頭禪師爲師、又取名清源、從此在紫霞洞隱修、數年後去世。青幫即以達摩爲始祖、以金幼

- (11) 孜爲第一代祖師。」(上海書店、一九九八) 九八、九九頁
- (12) 顧應祥『靜虛齋惜陰錄』卷十二「金碧峯者、勝國一和尚也、寓宣州。太祖過江、元氏故臣迎、謂曰「將來軍恃霸、我當有財賄納贖。」太祖叱之曰「我應天順人行王道、汝敢以霸視我耶?故臣曰「若篤行王道可尋宣州胡僧金碧峯。」(『四庫全書存目叢書』第八十四冊、齊魯書社、一九九五) 一四二頁
- (13) 『明書』卷一百六十、異教傳「時太祖渡江、偶一元臣迎謂曰「今慾霸、我將財貨納贖。上叱曰「我本順天應人行王道、汝敢霸視我耶?」元臣曰「若篤行王道、可尋宣州胡僧金碧峯、必有所授。」(清畿輔叢書本、嚴一萍選輯『百部叢書集成』、一九六〇) 一八七二頁
- (14) 萬曆『應天府志』卷二十三、雜誌下「碧峯寺在聚寶門外、即古瑞相院鐵索寺故基。國朝洪武中僧金碧峯建、賜今額。」(『四庫全書存目叢書』第二〇三冊、齊魯書社、一九九五) 一九四頁
- (15) 『金陵梵刹志』卷三十八「國朝洪武中敕建、居異僧金碧峯、因名。」(『四庫全書存目叢書』第二四四冊、齊魯書社、一九九五) 三三五頁
- (16) 明喜『緇門世譜』臨濟派條「又第十四世界源禪師。嗣法門人性金。號碧峯。又旁出一枝。(中略)又碧峯下第二世鵝頭禪師。於北京西山。建萬壽戒壇。橫出臨濟一枝。」(『續藏』・一・二四〇)
- (17) 守一重『宗教律諸家演派』「自六祖法傳南嶽讓。南嶽傳馬祖一。馬祖傳百丈海。百丈傳黃檗運。黃檗運傳臨濟義玄禪師。後人立爲臨濟宗。(中略)臨濟下十九世。碧峯性金禪師。演派二十字。(中略)臨濟下二十五世(碧峯下第七世)突空智板禪師演派十六字。(中略)臨濟下二十七世(突空下第三世)北京西山鵝頭禪師。演派二十四字。」(『續藏』・一・二六二)
- (18) 明河『補續高僧傳』「寶金。號碧峯。乾州永壽石氏子。生多祥異。六歲依雲寂溫公爲弟子。剃落具戒。(中略)遂游五臺山。(中略)師乃就山建靈鷲菴。四方聞之。不遠千里。負餼糧來獻者。(中略)至正戊子冬。順帝遣使者。召至燕都。慰勞甚至。(中略)洪武戊申。我太祖卽位于建業。明年己酉。燕都平。又明年庚戌。詔師至南京。見上於奉天殿。(中略)遂留於大天界寺。時召入。問佛法。(中略)時疾已革。不能詣闕謝。至六月四日。沐浴更衣。與四眾言別。(中略)夷然而逝。世壽六十五。僧臘五十九。」(『續藏』・十四・一二九)
- (19) 元賢輯『繼燈錄』「代州五臺靈鷲碧峯寶金禪師。乾州永壽人。姓石氏。(中略)未幾果生師。白光燁燁照室。六歲禮雲寂溫法師爲童子。及受大僧戒遂徧詣講肆。(中略)既寤遂遊五臺山。(中略)師乃就山結靈鷲菴以居。聲光日露。四方聞之不遠千里。負餼糧來獻者日續紛也。(中略)至正戊子順帝遣使詔至京。甚敬之。命住海印寺。

(中略) 太祖高皇帝即位詔師至南京。見上于內殿。問佛法大意。(中略) 未幾示微疾。弟子請留末後句。師曰。

三藏法寶尙爲故紙。吾言慾何爲。怡然而逝。壽六十五臘五十九。(續藏)・五・三九七)

(20) 『明史』卷一百四十七、列傳第三十五「金幼孜、名善以、字行、新淦人。建文二年進士、授戶科給事中。成祖即位、改翰林檢討、與解縉等同直文淵閣、遷侍講。(中略) 明年北征、幼孜與廣、榮扈行、駕駐清水源、有泉湧出。幼孜獻銘、榮獻詩、皆勞以上尊。帝重幼孜文學、所過山川要害、輒命記之。幼孜據鞍起草立就。使自瓦剌來、帝召幼孜等傍輿行、言敵中事、親倚甚。」(中華書局、一九七四) 四一二七頁

(21) 『明史』卷一百五十七、列傳第四十五「九年命與宋禮同治會通河、又同徐亨、蔣廷瓚凌浚魚王口黃河故道。」(中華書局、一九七四) 四二八七頁